

# 統計にみる三重県内の近代「花街」

今 村 洋 一\*

“Kagai” in Mie Prefecture: Analysis of the Statistics from the Meiji Period  
to the Early Showa Period

Yoichi IMAMURA

## 1. はじめに

### 1.1 背景と目的

本稿は愛知県、岐阜県を対象とした拙稿<sup>[1][2]</sup>に続き、三重県を対象として、明治～昭和初期の統計から近代花街の一端を明らかにしようというものである。なお花街とは、料理屋（料亭）、待合茶屋、芸妓置屋が集積する遊興空間を指す。芸妓置屋に身を置く芸妓が、取次をおこなう検番の差配により、料亭や待合茶屋に出向き、芸を披露し宴を盛り上げたわけだが、こういった宴をお座敷と呼んだ。

かつては、全国津々浦々600か所程度はあったとされる花街だが、現在は30～40程度にまで減じている。本稿の対象である三重県内に限ってみれば、花街は現在、桑名しか残っておらず、三重県内にかつてあった花街について窺い知ることは容易でない。そこで本研究では、国会図書館に所蔵されている明治～昭和初期の『三重県統計書』（三重県発行）に掲載されている花街関連統計データを整理し、近代における三重県内の花街の盛衰を明らかにすることを目的としている。

### 1.2 花街関連統計の詳細

警察の取締対象となっていた4業種（料理屋、待合茶屋、芸妓置屋、芸妓）に関する統計を分析対象としたかったが、『三重県統計書』においては、待合茶屋と芸妓置屋の統計がほとんどない<sup>1)</sup>。各年末時点での料理屋の営業者数（軒数）と芸妓の人数は、警察取締営業者の欄において、原則、警察署の管内ごとに集計されているので、この2つを分析対象とする。

本研究で扱うのは、国会図書館に所蔵されている明治から昭和初期にかけての『三重県統計書』であり、具体的には、明治19年（1886）～昭和15年（1940）である。ただし、この期間中で入手できない年次や、ある業種が未掲載という年次もあるので、必ずしも連

---

\* 文化情報学部 文化情報学科

統的にデータがとれるわけではない。なお、警察署の管内ごとに掲載されていたのは、明治35年（1902）以降の統計書であるので、本研究では主に、明治末期から昭和初期（戦前期）までの花街の盛衰を明らかにすることになる。

## 2. 三重県全域でみた花街関連統計

まず、料理屋および芸妓について、三重県全域の総計の推移を見ていきたい。『三重県統計書』では、それぞれ総計が記載されているが、明治35年（1902）以降の統計において、警察署管内ごとの数値を合計した値と齟齬がある場合は、警察署管内ごとの数値を合計した値を採用する<sup>2)</sup>。

### 2.1 料理屋数の推移（図1）

三重県内の料理屋数を把握できる最も古い『三重県統計書』は、明治19年（1886）のもので261軒となっている<sup>3)</sup>。明治21年（1888）に329軒となってからは、大正9年（1920）まで、およそ300軒台で推移しており、ほぼ横ばいと言えよう。この間、300軒台から外れる年次もあるが、前後の年次の数値と乖離した理由は不明である<sup>4)</sup>。なお、明治34年（1901）までは市郡別の集計がベースであり、商業関連の統計（年税徴収の戸数）として集計されている。大正10年（1921）以降は緩やかに増加し、昭和7年（1932）に661軒でいったんピークを迎え、その後は漸減している。しかし、昭和13年（1938）に1,291軒と急激に倍増しており不自然である。取締規則の改定により料理屋の定義が広がったというわけでもない。多くの警察署管内の料理屋数は跳ね上がっているものの、逆に減少した警察署管内もある<sup>5)</sup>。

### 2.2 芸妓数の推移（図1）

三重県内の芸妓数を把握できる最も古い『三重県統計書』は、明治34年（1901）のも

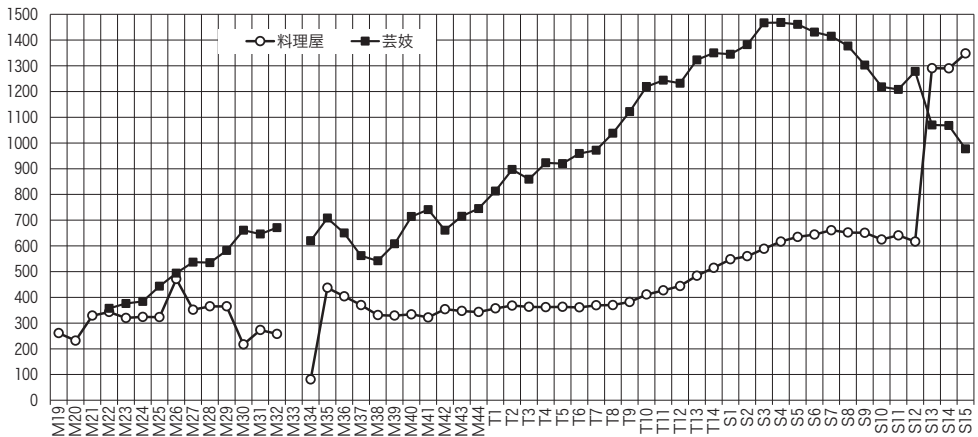


図1 三重県内の料理屋数及び芸妓数の推移

(注) 明治22年（1889）～明治32年（1899）の芸妓数は推計値。

## 統計にみる三重県内の近代「花街」

ので620人となっている。なお、明治22年（1889）～明治32年（1899）の統計書には、毎月課される営業税の納税者延べ数が掲載されていたため、それを月数12で除した数値を芸妓数とみなして、図1に表示している。そのため、図1の明治22年（1889）～明治32年（1899）の芸妓数は、実際の統計ではなく推計値であるが、およその芸妓数として捉えるには問題ないであろう。すると、明治半ばから昭和初期にかけて、増減はあるものの増加傾向が長く続いたことが分かる。そして、昭和4年（1929）に1,468人でピークを迎えた後に減少傾向に転じ、昭和15年（1940）には977人と千人を割り込んで大正中頃の水準に戻っている。

芸妓数のピークが昭和4年（1929）であり、不自然に倍増する前の料理屋数のピークが昭和7年（1932）であることから、戦前ではこの頃が三重県の花街の最盛期と言えよう。

### 3. 昭和初期における警察署管内ごとの花街関連統計比較

ここでは花街が最も賑わっていたと考えられる昭和初期、特に三重県の芸妓数がピークを迎えた昭和4年（1929）を対象として、各警察署の管内における料理屋数と芸妓数を比較する（表1）。

料理屋に関しては、宇治山田、津、上野、松阪の4警察署管内で50軒を超えている。芸妓に関しては、宇治山田署管内が249人、続いて津署管内が242人で多く、他に桑名、松阪、四日市、上野の各警察署管内も100人以上となっている。各警察署管内の人口に差があるので、人口10万人当たりの芸妓数をみてみると、桑名署管内が279.2人で最多であり、津署管内が259.5人で続く。三重県全体の平均が127.6人であるので、この2つの警察署管内ではその倍以上ということになる。この他、尾鷲（197.5人）、宇治山田（195.2人）、上野（190.6人）、富田（186.1人）などは200人近い。

なお、料理屋数が50軒超の4警察署管内は、芸妓数も100人超であった。このうち、宇治山田署と津署は、当時既に市制を施行していた宇治山田市、津市を管内に有しており、前者は伊勢神宮の鳥居前町として、後者は城下町を起源とする県都として栄えた。また、松阪署、上野署の両管内にも城下町を起源とする都市（当時、松阪町、上野町）があり、お伊勢参りの参宮街道も通っていた。

表1 昭和4年（1929）の警察署管内別の料理屋及び芸妓の営業者数

警察署	料理屋	芸妓	10万人当たり芸妓数	人口	管轄区域
桑名	41	172	279.2	61,594	桑名郡一円
大泉原	24	17	39.0	43,605	員弁郡一円
四日市	39	133	152.9	86,959	四日市市一円及び三重郡の内 海蔵村・羽津村・三重村・神前村・川島村・常盤村・日永村・四郷村・小山田村・内部村・河原田村・楠村・鹽濱村
富田	31	66	186.1	35,474	三重郡の内 富田町・富洲原町・川越村・朝日村・大矢知村・八郷村・下野村
菰野	16	20	73.5	27,202	三重郡の内 菰野町・千種村・朝上村・竹永村・保々村・鶴川原村・泉村・櫻村・水沢村
亀山	22	59	103.3	57,121	鈴鹿郡一円
神戸	34	58	161.2	35,983	河芸郡の内 神戸町・白子町・若松町・河曲町・栄村・箕田村・天名村・稲生村・玉垣村・飯野村・一ノ宮村

今 村 洋 一

一身田	15	20	66.0	30,304	河芸郡の内 一身田町・大里村・高野尾村・棕本村・明村・合川村・上野村・豊津村・白塚村・栗真村・黒田村
津	60	242	259.5	93,274	津市一円及び安濃郡一円
久居	21	23	29.2	78,854	一志郡の内 久居町・戸木村・本村・七栗村・稲葉村・榑原村・大三村・倭村・八ツ山村・境村・竹原村・家城村・川口村・大井村・高岡村・川合村・波瀬村・中郷村・豊地村・中川村・豊田村・中原村・香良洲町・高茶屋村・雲出村・小野江村・天白村・鶴村・松ヶ崎村・米ノ庄村・阿坂村・桃園村・宇気郷村
奥津	2	—	—	12,470	一志郡の内 八幡村・伊勢地村・太郎生村・八知村・多気村・下之川村
松阪	54	137	173.4	79,020	飯南郡の内 松阪町・神戸村・花園村・松尾村・西黒部村・港村・朝見村・機殿村・漕代村・射和村・櫛田村・柿野村・大石村・茅廣江村・大河内村・伊勢寺村・松江村
宮前	7	—	—	15,197	飯南郡の内 宮前村・粥見村・川俣村・森村・波瀬村
相可	10	—	—	35,304	多気郡の内 相可町・津田村・丹生村・五ヶ谷村・川添村・西外城田村・佐奈村・齋宮村・明星村・大淀村・上御絲村・下御絲村・東黒部村
天ヶ瀬	6	1	8.4	11,889	多気郡の内 萩原村・三瀬谷村・領内村・大杉谷村
宇治山田	68	249	195.2	127,546	宇治山田市一円及び度会郡の内 神社町・大湊町・二見町・田丸町・四郷村・濱郷村・御園村・豊濱村・北濱村・小俣村・有田村・下外城田村・城田村・東外城田村・内城田村・宮本村・沼木村・小川郷村・一之瀬村・中川村・五ヶ所村・宿田曾村・徳原村・神原村・南海村
野後	8	—	—	12,167	度会郡の内 瀧原村・柏崎村・大内山村・七保村
吉津	3	—	—	12,152	度会郡の内 吉津村・島津村・鶴倉村・中島村
鳥羽	17	27	61.1	44,161	志摩郡の内 鳥羽町・答志村・桃取村・菅島村・神島村・加茂村・鏡浦村・的矢村・長岡村・安楽村・國府村・鶴方村・坂手村・神明村・磯部村・濱島村
波切	—	—	—	26,871	志摩郡の内 波切町・名田村・甲賀村・志島村・立神村・畔名村・船越村・片田村・布施田村・和具村・越賀村・御座村
尾鷲	14	62	197.5	31,390	北牟婁郡の内 尾鷲町・九鬼村・引本町・相賀町・船津村・須賀利村・桂城村
長島	2	13	77.0	16,876	北牟婁郡の内 長島町・二郷町・三野瀬村・赤羽村・錦村
木本	30	16	42.5	37,611	南牟婁郡の内 木本町・有井村・市木村・神志山村・神川村・五郷村・飛鳥村・新鹿村・泊村・荒坂村・南輪内村・北輪内村
鶴殿	—	—	—	19,503	南牟婁郡の内 鶴殿村・井田村・御船村・阿田和村・尾呂志村・西山村・入鹿村・上川村・相野谷村
上野	60	106	190.6	55,620	阿山郡の内 上野町・小田村・城南村・花之木村・長田村・鳥ヶ原村・新居村・三田村・府中村・河合村・中瀬村・丸柱村・山田村・布引村・阿波村・友生村
柘植	9	1	6.4	15,528	阿山郡の内 東柘植村・西柘植村・壬生野村・鞆田村・玉瀧村
名張	12	45	143.0	31,466	名賀郡の内 名張町・錦生村・瀧川村・箕曲村・比奈知村・國津村・蔵持村・薦原村・美濃奈美多村・古山村・花垣村・猪田村
阿保	12	1	6.7	14,942	名賀郡の内 阿保町・上津村・種生村・比自岐村・矢持村・神戸村・伊那古村
合計	617	1,468	127.6	1,150,083	

#### 4. 警察署管内ごとにみた花街関連統計の推移

##### 4.1 対象とする警察署管内と花街関連統計

ここでは、花街の隆盛を最もよく表していると考えられる芸妓数に着目して、その推移を追ってみたい。明治35年（1902）より昭和15年（1940）まで、毎年末時点での各警察署管内の芸妓数を把握できる。なお、ここでの対象は、芸妓数の多い、桑名、四日市、津、松阪、宇治山田、上野の6警察署管内とする。

## 4.2 芸妓置屋数及び芸妓数の推移

### (1) 桑名署管内 (図2)

桑名署管内の芸妓数は、明治末期から大正初期にかけて、40人台から70人台まで増減を繰り返していたが、大正期に入ってから急増して大正11年(1922)に163人となった。大正末期にやや減少したものの再び増加に転じて昭和5年(1930)に183人でピークを迎えているが、これは最も少なかった明治30年代の水準の4倍程度である。なお、この前後数年(昭和3～9年頃)が桑名署管内における花街の最盛期と言ってよい。その後は減少して、昭和15年(1940)には123人と大正中期の水準に戻っている。

### (2) 四日市署管内 (図3)

四日市署管内の芸妓数は、明治末期は60～80人程度で推移していたが、大正期に入ると100人を超え、大正中期に急増して大正11年(1922)に198人でピークを迎えている。これは最も少なかった明治30年代の水準の3倍程度である。その後は急減して、大正末期以降はおよそ120～140人程度で推移しており、大正中期に水準に戻ってほぼ横ばいとなったと言える。なお、四日市港の開港場指定は明治32年(1899)であり、図3は四日市が国際貿易都市となって以降の推移を表していることになる。また、海軍燃料廠の設置は昭和16年(1941)であり、図3の期間の後の出来事なので、その影響はない。

### (3) 津署管内 (図4)

津署管内の芸妓数は、明治38年(1905)までは60～70人程度で推移し、その後、急増して明治末期から大正中期にかけては、100～130人程度で増減している。大正後期から昭和初頭にかけては、さらに急増し、昭和4年(1929)に242人でピークを迎えているが、これは最も少なかった明治30年代の水準の4倍程度である。なお、芸妓数が200人を超えていた大正14年(1925)～昭和8年(1933)頃が津署管内における花街の最盛期と言えよう。ピーク後の芸妓数は増減を繰り返しながら減少し、昭和15年(1940)には145人と大正末期の水準に戻っている。

### (4) 松阪署管内 (図5)

松阪署管内の芸妓数は、明治末期から大正中期にかけて80～100人程度で推移した後、大正後期に増加傾向となり、大正11年(1922)に144人となった。その後は緩やかな減少と増加を経て昭和8年(1933)に156人でピークを迎えているが、これは最も少なかった明治40年前後の水準の2倍程度である。その後は減少して、昭和15年(1940)には110人と大正中頃の水準に戻っているが、大正後期から昭和初期にかけては、120～150人程度で推移しており、ほぼ横ばいと言えよう。明治末期の芸妓数が比較的多く、一方で昭和初期にかけてそれほど増加せず、芸妓数は緩やかに推移した。

### (5) 宇治山田署管内 (図6)

宇治山田署管内の芸妓数は、明治末期から大正中期にかけて120～140人程度で推移した後、大正後期に増加傾向となり、大正末期には急増した。昭和初頭に横ばいとなったなかで、昭和4年(1929)と昭和6年(1931)に249人でピークを迎えているが、これは最も少なかった大正初期の水準の2.5倍程度である。なお、芸妓数が230人を超えていた大正14年(1925)～昭和7年(1932)頃が宇治山田署管内における花街の最盛期と言えよう。昭和8年(1933)に急減した以降は減少傾向となって、昭和15年(1940)には152人と大正後期の水準に戻っている。

(6) 上野署管内 (図7)

明治36年(1903)と明治37年(1904)の芸妓数が極端に少ない外れ値となっているため、この2か年を除いて分析したい。上野署管内の芸妓数は、明治末期は50人程度で推移した後、大正期に緩やかに増加し、大正9年(1920)から昭和5年(1930)の約10年間で、100人程度で推移している。この時期が上野署管内における花街の最盛期と言えよう。ピークは、大正12年(1923)の108人であるが、これは最も少なかった明治末期の水準の2倍程度である。昭和5年(1930)頃からは減少傾向となって、昭和15年(1940)には41人と明治末期の水準に戻っている。

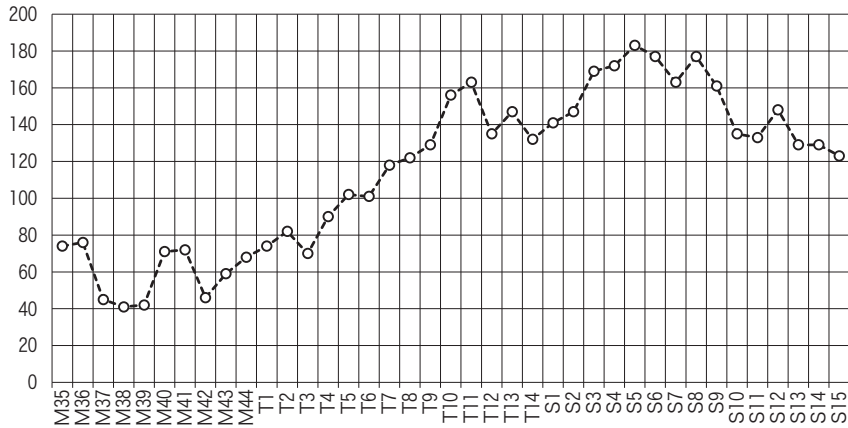


図2 桑名署管内の芸妓数の推移

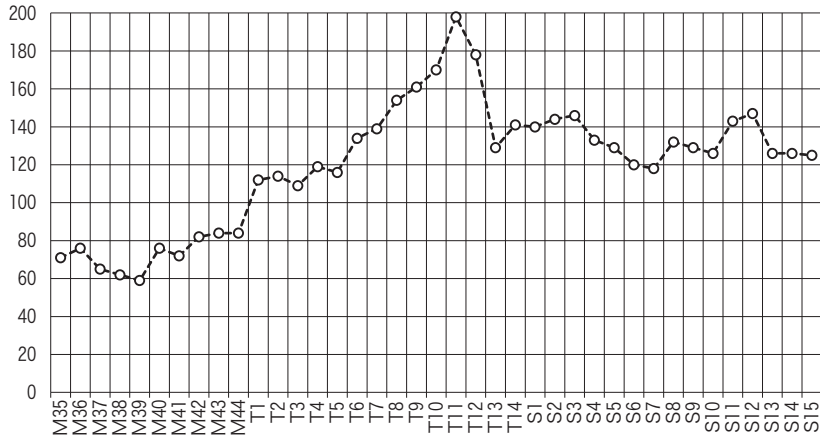


図3 四日市署管内の芸妓数の推移

統計にみる三重県内の近代「花街」

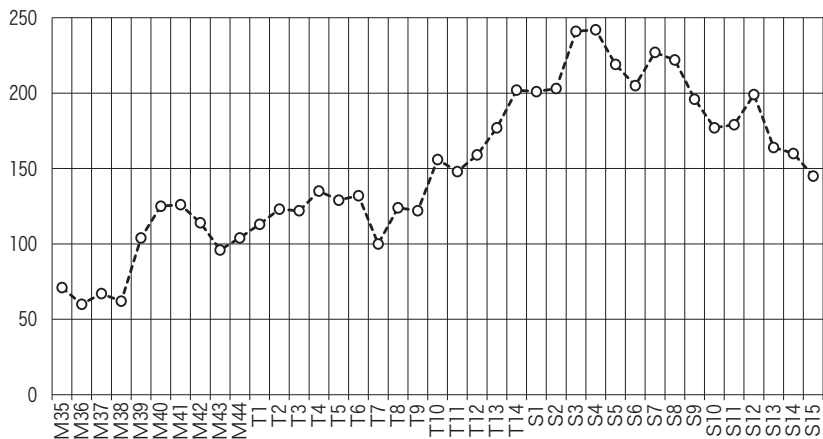


図4 津署管内の芸妓数の推移

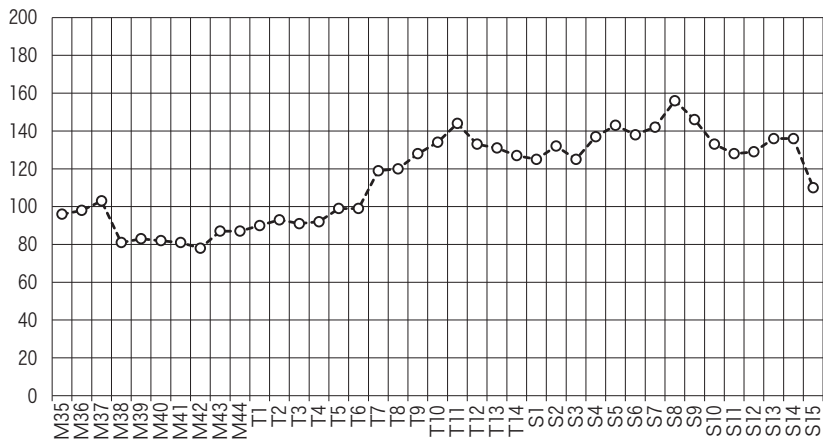


図5 松阪署管内の芸妓数の推移

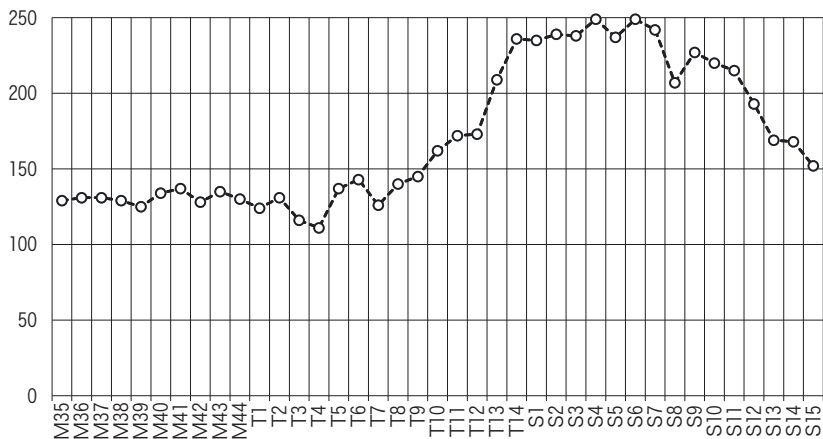


図6 宇治山田署管内の芸妓数の推移



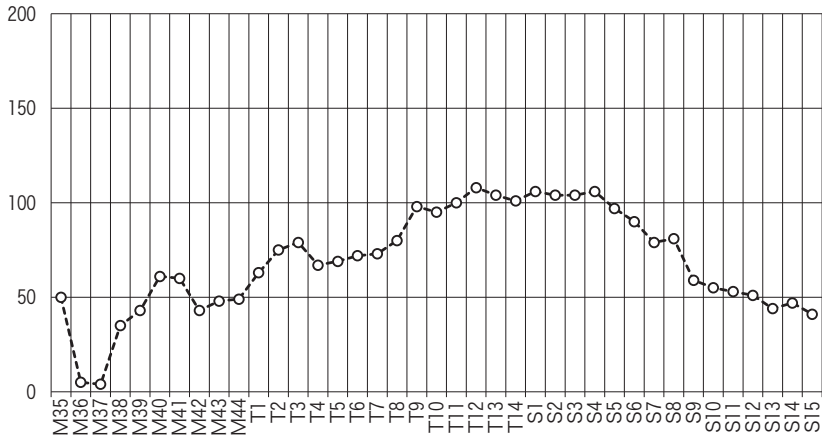


図7 上野署管内の芸妓数の推移

(注) 明治36年(1903)と明治37年(1904)の芸妓数は極端に少ない外れ値となっているが、その要因は不明である。『三重県統計書』の誤記の可能性もある。

## 5. まとめ

一般に、戦前における花街の最盛期は、昭和4年(1929)前後とされるが、『三重県統計書』の芸妓数のピークも昭和4年(1929)なので一致している。芸妓数は明治半ばからコンスタントに増加しており、約40年という長い時間をかけて、花街が拡大してきたことが窺える。なお、料理屋数について、不自然に倍増する昭和13年(1938)以前の推移をみると、大正末期から昭和初頭に漸増してピークを迎えたことが分かる。芸妓数と料理屋数の推移から、昭和3年(1928)からの5年間程度を三重県における花街の最盛期と言ってよい。

警察署管内ごとの統計からは、宇治山田(鳥居前町)、津、松阪、上野(以上、城下町)といった近世から核となる都市部を含む管内において、料理屋数も芸妓数も多かったことが分かる。また、桑名(城下町)、四日市(宿場町、港町)の管内においても、芸妓数は多く、都市部あるいは一定規模以上の街場において花街が発達していたことが窺える。これらの管内における芸妓数は、三重県全体での推移と同様に、大正期から昭和初頭にかけて増加してピークを迎えているケースが多い。その中で、大正末期にはピークから減少に転じて、その後は横ばいで推移している点で、四日市署管内だけは異なった。また、桑名署、津署の両管内では、明治30年代と昭和初頭のピークで、芸妓数の差が4倍もあることから、この間に花街が大きく拡大していったと考えられる。

警察署管内によって芸妓数の推移は若干異なり、三重県内の花街の隆盛は一律ではない。しかし、四日市署管内のような一部を除けば、大正期から昭和初頭にかけて花街が発展し、その後は元の水準に近づいていくといった大まかな傾向が読み取れることから、三重県内では、都市や地域による差が比較的小さかったと言えよう。



## 統計にみる三重県内の近代「花街」

### 謝辞

本稿は、科学研究費補助金（課題番号16H04471）の助成を受けたものである。ここに記して謝意を表したい。

### 補注

- 1) 待合茶屋については、年次によっては項目建てがされているものの数値の掲載はなく、待合茶屋がまったくないのか、集計されていないのかの判断もつかない。芸妓置屋については、昭和12年（1937）～昭和15年（1940）の4か年のみ掲載されており、その中では、昭和12年（1937）の2,971軒が三重県全体での芸妓置屋数の最大値である。
- 2) 料理屋数については、明治25年（1892）、明治40～43年（1907～1910）、芸妓数については、明治40～42年（1907～1909）、明治44年（1911）、大正2年（1913）、大正4年（1915）において、警察署の管内ごとの数値を合計した値を採用している。
- 3) 明治17年（1884）と明治18年（1885）の統計もあるが、県内一部区域の統計が不明な状態で集計されており、三重県全域の数値となっていないため除外した。
- 4) 例えば、明治26年（1893）は471軒で、前年の323軒、翌年の352軒と比較して突出しているが、奄芸郡・河曲郡96軒（前年46軒、翌年49軒）や飯高郡・飯野郡110軒（前年25軒、翌年24軒）の影響が大きい。また、明治30年（1897）は217軒で前年の365軒から激減しており、桑名郡16軒から5軒へ、北牟婁郡52軒から16軒へ、津市15軒から1軒へ、といったように多くの市郡で減少している一方で、度会郡は53軒から89軒に増加している。明治34年（1901）に至っては81軒と最小値であり、前々年の258軒と比較しても大きく減少しているが、特に、度会郡15軒（前々年102軒）や北牟婁郡10軒（前々年57軒）の減少幅が大きい。
- 5) 減少したのは28管内中4管内（桑名署、大泉原署、四日市署、阿保署）のみで、例えば亀山署管内は16軒から70軒へ、津署管内は72軒から193軒へ、宇治山田署管内は59軒から112軒へ、尾鷲署管内は14軒から55軒へ、といったように多くの管内で激増している。

### 参考引用文献

- [1] 今村洋一（2021）「統計にみる愛知県内の近代「花街」」椋山女学園大学研究論集（社会科学篇）第52号，pp. 43-57
- [2] 今村洋一（2022）「統計にみる岐阜県内の近代「花街」」椋山女学園大学研究論集（社会科学篇）第53号，pp. 69-78